

庄内の画家たちと 池袋モンパルナスの繋がり

学芸主任 武内 治子

はじめに

1920年代以降、現在の池袋を中心とする地域に芸術家向けのアトリエ付き住宅が次々と建ち始めた。これらの物件は家賃が安かったために、日本各地より上京した画学生、画家、彫刻家、詩人、評論家などの芸術家たちが集い、いくつかの「アトリエ村」と呼ばれる一画が形成されていった。アトリエ村は「さくらが丘パルテノン」、「つづじが丘アトリエ村」、「すずめが丘アトリエ村」など称され、1930～40年代の最盛期には数百人の芸術家たちが住んでいたと言われている。この界限では、芸術家が暮らし、制作し、そして互いの家を行き来しながら時には熱い芸術論を交わすなど、会派を超えた繋がりによって、新たなアートシーンを生み出す場となっていた。アトリエ付き住宅が建ち並ぶこの様子は、芸術の都パリになぞらえて「池袋モンパルナス」と呼ばれていた。

さて、庄内地域は、鶴岡市と酒田市を核とした2市3町で構成され、山形県の日本海側に位置し、海と山に囲まれた広大な平野が広がる自然豊かなエリアである。東京から遠く離れた庄内地域と池袋モンパルナスが一体どんな繋がりがあるのか——と、疑問に思う方も多いのではないだろうか。実は、池袋界限に住んでいた画家の中には、庄内地域出身の画家がいる。鶴岡市出身の齋藤求と今井繁三郎、酒田市出身の小野幸吉と齋藤長三である。アトリエ村の画家たちは、北海道や沖縄など各地から上京してきた者が多く集まっていたが、東北の庄内地域という限られた範囲で、4人の画家を輩出したことは特筆すべき事柄である。また、彼らが池袋モンパルナスの画家たちと交流したことで、庄内地域の芸術・文化にどのような作用をもたらせたのかについては、これまで検証されて来なかった。

本稿では、池袋モンパルナスの画家たちと庄内の関わり合いについて、彼らの残した交流の痕跡を辿り、郷土の美術団体である白薺社の活動や、東北出身者で結成された「東北生活美術研究会」の活動にも触れながら明らかにしたい。

1. 小野幸吉と大野五郎の青春

庄内地域出身の画家で初めてアトリエ村に住んだのは「酒田のゴッホ」と称された小野幸吉である。小野幸吉は1909(明治42)年、酒田市に生まれ、酒田中学校(現・県立酒田東高等学校)で、油彩を描き始めるが、ほとんど独学で習得する。小野は、画家を志して1925年に上京、太平洋画会研究所に通い、翌年には川端絵画研究所で、親友となる大野五郎と出会う。1926(大正15)年頃に、小野は長崎にある林武の家の隣へ移り住む。しばらくして、林が引越す際、絵具で畳が汚れていたため、大家から畳を取り換えるよう請求されたが、年下の絵描きである小野を住ませることによって、畳の弁償を免れたと林は後に回想している^[1]。小野は、1928(昭和3)年に一九三〇年協会が設立されると大野とともに通い、里見勝蔵、林武らに師事し、田中佐一郎や峰村リツ子らと親交を深めながら、制作に励む日々を送った。小野は1928年と1929年、一九三〇年協会展に連続で出品している。体の弱かった彼はまさに命を削りながら精力的に作品を描き、1930年1月8日、20歳の若さでこの世を去った。同年、一九三〇年協会展に小野の遺作3点が黒いリボンを添えられ、特別陳列された。

画家の大野五郎は小野との出会った頃のことを次のように回想している。

雨のどしゃぶりに降った春先の寒い頃、水道橋駅のプラットフォームで彼と最初に話した。その頃、彼も私も川端研究所に通っていたが、お互い知らん顔していたので口を聞くことはなかった。その

研究所の帰り、紺の詰襟を不器用に着た彼が大きな目玉をくりくりさせて、私の肩をきまり悪そうに叩いた。「俺の友達にならんか」と言うので、私はうんと答えた。私は彼より一つ年下だった。立て続けに彼は饒舌り出した。「俺は十九で小野って者だ。故郷は酒田で恋人がいるんだ。」(中略)彼は、何枚か自分の絵を示して批評しろと責めた。あまりに美しい、強烈な小野の色彩に驚いて、私はなんにも言わないでいた。彼は不平そうな顔つきで、「こんな絵びら」とかなんとか、ぶりぶり眩きながら、引込めてしまった。彼の顔はだんだん蒼褪めてきた。「もう君帰ってくれないか」と突然せわしく言いだして、鼻の先に手をあげたら、真っ赤な鼻血が紺の服にどくどく流れ落ちた。私は不愉快な気持ちで雨の中を帰った。

私は彼を好きになった。それから四年友情を熱くしてきた。一緒に酒を飲んだ。喧嘩もした。街から街へと夜遅くまで彷徨いたことも度々だった。彼の故郷に旅行した夏の記録も、今となれば楽しく悲しい。(中略)懐かしいものだ。思い出すことは沢山あるが私には何も書けない。小野も絵が描けないで淋しかろう。^[2]



fig.1)写真「小野幸吉」
撮影：大野五郎

二人の青春の日々が熱く語られたこの回想から分かるように、大野と小野は互いに生涯の友として認め合っていた。

小野幸吉の画集や雑誌の特集で必ず掲載される肖像写真がある(fig.1)。この写真は、大野が1927年6月15日に撮影した小野の姿である。場所は温海温泉で、二人で小野の酒田の実家へ一泊した後に、鶴岡へ移動し滝野屋旅館別館に一月、スケッチをするため滞在している。大野の夏の旅行の思い出はこの時のことを指している。

二人の師である里見勝蔵は、一九三〇年協会の研究所での彼らの様子について、「一枚の絵で、大野君が手古ずると小野君が描き、小野君が休んだ日は大野君がそれを描いていたのもその頃だ。」と後に回想している。里見は、二人が共作で作品を描くことを咎めるよりもむしろ彼らの友情の証として好意的に見守っていたようだ。また、里見は二人が描く絵は全然違っていたとも証言している。

二人の友情を示す1枚の絵がある。



fig.2) 表：小野幸吉《Aの顔》、油彩、1929年
裏：大野五郎《無題》

小野幸吉の作品《Aの顔》(fig.2)の裏には、大野五郎が描いた男の肖像が残されている^[3]。目を伏せた男を描いた大野に対し、小

*本論は、武内治子「庄内の画家たちと池袋モンパルナスの繋がり」『令和2・3年度市町村立美術館活性化事業 第21回共同巡回展 板橋区立美術館・豊島区所蔵 池袋モンパルナス—画家たちの交差点—』図録、第21回共同巡回展実行委員会、2021年、p.126-128をもとに加筆・修正を加えたものである。



fig.3) 小野幸吉《八丈島 三根港》
1927年、油彩、木、
八王子市夢美術館蔵(大野五郎旧蔵)

野は、まっすぐ前を見つめる成端な顔つきの男の肖像を描いている。二人は当時、新しい表現方法であったフォーヴィスムに傾倒していたが、大野の方が漆黒の太い輪郭線と激しい筆致で描いている。二人の作品は全然違うと評価した里見の証言のとおりである。

大野が晩年まで大切にしていた小野の作品が、

現在八王子夢美術館に収蔵されている (fig.3)。小野の旅行歴から1927年に八丈島へ写生旅行をした時に描いたものと推測される⁽⁹⁾。大野が直接小野から渡されたものなのかは定かではないが、若き日の青春を共にした親友の作品を手元に置いていた大野の想いは計り知れない。

小野が亡き後の1932年、佐藤三郎(本間美術館元館長)の声掛けで、『小野幸吉画集』(金星堂)が300部限定で自費出版された。そこに、池袋モンパルナス周辺の画家たち——師である林武、里見勝蔵、そして大野五郎ら友人たち——の追悼文が掲載されたことで、当時無名であった小野の作品が、時を経て美術評論家の洲之内徹の目にとまる。彼は、美術雑誌の編集者から『小野幸吉画集』を借り、実際の絵を見るため1937年に酒田を訪れ、小野作品と対面をする。翌年、自身の運営する現代画廊において、「小野幸吉遺作油絵展」を開催、その後も美術雑誌のエッセー「気まぐれ美術館」でも取り上げ、一気に小野幸吉の作品の評価は高まったのである。

小野の作品を後世に残そうと画集を出版した酒田の人々と、大野五郎をはじめとした池袋モンパルナス周辺の画家たちが繋がり、小野幸吉は死後、「酒田のゴッホ」として全国でも評価される夭折の画家となったのである。

2. 今井繁三郎が繋いだ 白鷺社と中央画壇の交流について

色彩の画家とも評される庄内の画家・今井繁三郎は、池袋モンパルナス周辺の画家たちと交流を深めた。そして、故郷の美術団体・白鷺社の会員たちの育成及び庄内地域の芸術振興のため、中央画壇で活躍する池袋モンパルナスの画家たちの作品を白鷺社展に特別陳列するという画期的な企画を立ち上げた人物である。本章では、今井が繋いだ白鷺社と中央画壇の交流について考えていきたい。

今井繁三郎は1910年、鶴岡市に生まれ、鶴岡中学校(現・山形県立鶴岡南高等学校)を卒業した1927年に、画家を志して上京する。1936年、洋画家・鷺田新太の誘いにより美之國に入社し、美術雑誌『美之國』の編集に携わる。『美之國』の取材で、会派を問わず様々な画家たちと親睦を深めたことは、後に庄内地域の美術団体・白鷺社に、大きな影響を及ぼすことになる。1937年頃、今井は豊島区長崎一丁目19番地に転居した⁽¹⁰⁾。

鶴岡市の美術団体・白鷺社は、1924年に創設され、庄内では歴史の長い美術団体である。1924年、当時鶴岡では手薄だった洋画の研究と地方美術の振興を目的として、鶴岡中学校の生徒であった18歳の星川清健(野坂貞勇)が、齋藤求ら6名の同志とともに、白鷺社の前身となる「白虹社」を創立した。翌年には「白鷺社」に改名し、鶴岡中学校の在校生が中心となり活動するが、酒田中学校(現・山形県立酒田東高等学校)の小野幸吉と佐藤三郎が第1回展、第2回展に出品している。白鷺社はその後も、I部(鶴岡中学在

生)、II部(卒業生)を同人とし、さらに一般人も1931年より出品できるように開放する。1937年には、II部同人の中から、中央画壇の美術団体に入選する者もいて、齋藤求(独立展、日本水彩展)、今井繁三郎(自由美術展)、山本甚作(朔月会)らがその後同団体を牽引していく。

このように、1920年代から庄内地域には、学生の創作発表の場があったことにより、同年代の画家を志す若者を多く輩出する土壌が既に出来ていた。

1938年、今井は画期的な企画を立ち上げる。第24回白鷺社展において、池袋モンパルナス界隈の画家たちをはじめとする中央画壇の作家8名の作品20点を特別陳列するのである。出品作家は、北川民次、難波田龍起、藤田嗣治、山口薫、三岸節子、向井潤吉、猪熊源一郎、山崎省三である。

今井は、その後も出品作家を変えながら、1940年まで中央画壇で活躍する作家の作品を特別陳列する。

1939年の第25回展による特別陳列作家は、福沢一郎、海老原喜之助、安井曾太郎、野田英夫(故)、木村荘八、中川紀元、伊勢正義、矢橋六郎、内田巖の9名で、計12点の作品が展示された。

1940年は皇紀2600年奉祝第26回記念に先駆け、北川民次を招き、講演会及び実技講習会が行われた。参加者は教員や学生、同行者50名余りが参加した。第26回展での特別陳列作家は、23名で43点の作品展示という大規模なものであった (fig.4)。

なお、同展の目録では25回と記載されているが、前後の目録により、正しくは26回である。特別陳列された中央画壇の作家は、

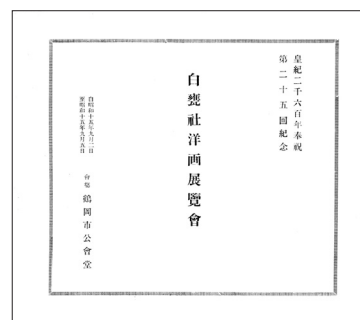


fig.4) 「皇紀2600年奉祝第25回記念
白鷺社洋画展覧會」目録、表紙

鈴木信太郎、小磯良平、中西利雄、早川國彦、鈴木亜夫、齋藤長三、寺田竹雄、伊藤久三郎、竹谷富士雄、脇田和、佐藤敬、高田力蔵、木村荘八、富樫寅平、宮坂勝、宮本三郎、岡鹿之助、川島理一郎、寺田政明、北川民次、小松義雄、荒井龍男、村井正誠である。また、北川が持参したメキシコ児童の作品10点も陳列され、学校の先生が引率し、地域の小学生が大勢鑑賞した。興味深いことに、今井繁三郎や齋藤求も当時から自由美術家協会や独立展でそれぞれ活躍していたが、特別陳列には並ばずに、あくまでも白鷺社側の一員として陳列されている。一方で、齋藤長三は酒田の生まれだが、独立展で活躍する中央画壇の作家として特別陳列枠で紹介されている。

1945年、今井は、長崎の自宅が空襲で全焼し、自らの作品とこれまでの取材資料を失った。友人で画家の吉井忠の日記にこの日の今井の自宅の様子が克明に記されている。

14日/(中略) 東の空、煙で被われ、余燼収まらぬ中に西の空から夜明けが来る。血の色をした太陽。静かな夜明け、全く変わり果てた風景。芝居の舞台が一転したやうだ。見渡すかぎりの焼け野。顔が熱い。目が痛い。口の中がチャリチャリする。今井氏のアトリエに行ってみた。風呂屋の辺から焼け残ってあるので大丈夫かと思ったが丸焼け。今井氏の所蔵本、ヤキモノ、作品他、全滅に比べれば小生の本、コーモリ、ナベ、ハンゴ等何でもない。いたる所に焼夷弾の筒、鼠の大根のやうに突きささってある。焼け跡の生活はじまる⁽¹¹⁾。

作品や取材資料を全て失った今井は、1945年鶴岡に帰郷し、同じく帰郷した齋藤求らとともに、敗戦の混乱のさなか、第31回展を開催する。翌年、白麁社は帰郷した作家らを中心に、庄内の美術団体としての方向性を話し合い、大きな決断をする。これまで、鶴岡中学校を中心とした伝統を変え、より広く同好者に呼び掛けられるようI部、II部制を廃止し、新たに彫刻部門も設置した。1957年、今井は白麁社委員長に就任し、以後齋藤求らと交互に会長・委員長を務めるようになる。

今井は戦中、中央画壇の作家たちと庄内地域の美術界を繋ぐパイプ役として、大きな役割を果たしていた。戦後も、今井は白麁社の会員に対し、自宅で画談会を開催したり、中央の美術団体へ積極的に出品をすすめたりと、会員たちの成長を切に願っていた。また、今井のほか、齋藤求や山本甚作らが中央画壇で制作活動を続ける一方で、白麁社の活動に積極的に関わり、地方の美術を盛り上げていった功績は大きく、今日の庄内地域の芸術の基盤となっている。今井や齋藤、その他多くの先人たちが築き上げた白麁社は、今年で創立97年を迎え、会員数104名の庄内地区最大規模の美術団体へと成長している。

3. 東北生活美術研究会について

東北生活美術研究会は、福島県出身の吉井忠が今井繁三郎に結成を持ちかけたことから始まった。メンバーは吉井忠（福島）、今井繁三郎（山形）、齋藤長三（山形）、福田豊四郎（秋田）、勝平得之（秋田）の5名である。吉井の日記によってその経緯は明らかになっており、今回は吉井の日記と同会の第1回、第2回の展覧会目録を合わせてどのような会だったのか検証したい。

同会は、1943年3月9日に吉井が今井の自宅を訪ね、「東北出身の有能且つ志を同じくする作家を集め年に一度『東北の生活を描く』展を銀座でやらう」⁽ⁱ⁾と持ち掛け、それに今井が応じ、二人でメンバーを選定して4月13日に結成された。同会では、秋田北部を取材し、課題を「家」として第1回展の準備を進める。吉井の日記では6月18日より秋田へ向かい、翌19日に大館へ入り25日まで秋田に滞在している。秋田へ入る前日17日に、齋藤と出発の打ち合わせをしているため、会の皆で秋田へ向かった可能性がある。同年、第1回展が銀座資生堂にて、9月20日から22日まで開催されるが、その目録には副題として、「秋田県北秋田郡、角館郡地方採集」とある。今井は不出品で、吉井が7点、福田が5点、齋藤が6点出品している。尚、勝平の氏名は掲載されていない。目録には曲田部落、別所部落、宮野平部落など描いた場所も記載されている。

1944年3月6日から8日まで第2回展が銀座資生堂にて開催される。同展目録によれば、今井が8点、吉井が5点、福田が8点である。齋藤は風邪で出品が叶わなかった⁽ⁱⁱ⁾。今回、副題は無いが、描いた場所は、藤島、京田村、荘内、鶴岡、温海町暮坪、秋田裏日本と記載されており、鶴岡（庄内地域）を中心としたテーマで描いている。2月12日から吉井は、秋田行の汽車に乗って、翌13日温海、14日五十川と鶴岡、16日には月山、羽黒へ滞在している。恐らく、制作のための取材に行ったと思われる。また、興味深いことに、展覧会最終日に酒田市出身の写真家・土門拳が会場に来て、「次回から一緒にやりたい」と吉井に申し出ている⁽ⁱⁱⁱ⁾。

吉井の日記から同会は吉井と今井が中心となって計画しており、今井は第2回展後の10月7日に吉井を訪ねて、同会のリーフレットを作成しようと持ち掛け、福田への原稿執筆の打診を吉井に依頼している。このことから、二人は同会をさらに充実したものにしようとしていたことが分かる。また、1944年は第2回展以後も、7月10日から7月12日、9月12日から9月14日、10月29日から10月31日と1年間で4回開催されており、吉井ははじめ同会メンバー

が精力的に制作に励み、発表した充実の年であった。

東北美術研究会は、5回の展覧会を開催して活動を終えることになるが、目録から推測するに、毎回東北の特定の地域を決め、取材旅行に出かけ、同じ課題で制作する方針があった。

吉井は1943年1月13日の日記に「地方の人々の生活を通して自然を通して何かその辺に流れている、新しい人間精神と云ふか歴史的精神をつかんでみたい^(iv)。」と記している。吉井の思いは参加するメンバーに共通したものではないだろうか。

同会のメンバーは洋画、日本画、そして版画と分野が異なっており、また第3回展では写真家の土門拳も加わる計画もあった。会派どころか分野を越えて、東北出身という共通点により結束し、新しいムーブメントを起こそうとしていたのである。

今後の課題として、中央画壇では同会の評価がどのようなものであったのか、また、その後の彼らの作品に何らかの影響があったのか、さらに検証する必要がある。

おわりに

庄内の画家たちがアトリエ村で暮らし、各地から集まった画家たちと交流することで、地方美術の活性化に繋がったり、また小野幸吉のように死後池袋モンパルナスの画家たちの証言がきっかけで再評価されたりと、様々な効果をもたらしたことが分かる。そして、戦局が悪化するなかでも、展覧会を開催し、芸術の発展を目指して奔走していた彼らの姿を忘れてはならない。東北地方から上京した彼らは中央画壇で活躍しながら、東北人として何を描き、どう表現していくのかを模索していた姿も東北生活美術研究会の活動を通して僅かながらに見えてきた。2021年に当館で開催された『令和2・3年度市町村立美術館活性化事業 第21回共同巡回展 板橋区立美術館・豊島区所蔵 池袋モンパルナス -画家たちの交差点-』では、洋画の作家中心の展示構成となったが、アトリエ村には日本画、彫刻、詩人など様々な分野の芸術家が集っており、彼らは会派も分野も越えて自由に交流していたのである。

- (i) 林武「小野幸吉を憶ふ」『小野幸吉全画集』、本の会、1987年、p.141
- (ii) 大野五郎「小野幸吉君のこと」、前掲書、p.145
- (iii) 里見勝蔵「回想」、前掲書、p.137
- (iv) 1998年に酒田市美術館で開催された『小野幸吉展』の準備のため、備前健吾学芸員が大野五郎に直接確認している。
- (v) 1927年、八丈島の写生旅行では2か月滞在し、友人の堀田清治が同行している。
- (vi) 今井の長女・廣瀬木ノ芽氏によると、1937～1938年頃に長崎に引っ越したが、詳細な時期は不明である。
- (vii) 「吉井の日記（1936-1945）書起こし」『池袋モンパルナス展 よこそ、アトリエ村へ!』図録、2011年、板橋区立美術館、p.150
- (viii) 前掲書、p.142
- (ix) 前掲書、p.146
- (x) 前掲書、p.146
- (xi) 前掲書、p.148
- (xii) 前掲書、p.141

【参考文献】

図録「創立81周年白麁社美術展 鶴岡アートフォーラム開館記念」白麁社、2005年
「資生堂ギャラリー七十五年史：一九一九～一九九四」資生堂、1995年

*引用部分で原文の旧字・旧仮名遣い箇所については適宜現行のものに改めた。